

ティーム・ティーチングの試み

高 井 收
Todd Durrant

1. はじめに

語学の授業においてネイティブスピーカーのティーチング・アシスタント（以下 T.A. という）を任用することはいろんな意味で普通の授業の助けとなる。小樽商科大学でも平成8年3月に「小樽商科大学ティーチング・アシスタント実施要項」ができ、大学院に在籍する優秀な学生に対し、教育補助業務の機会を提供している。この小論では平成10年度の昼間主コース大学1年生の英語クラス（E102A）および、夜間主コース2年生の英語クラス（E22A）において T.A. を迎えてティーム・ティーチングを行った授業内容とそのアンケート調査の結果を分析し報告する。

ティーム・ティーチングは広義の意味では2人以上の教師が同一の科目を教える場合の共同授業を指しているが、1987年に Japan Exchange and Teaching Program (JET プログラム) ができて以来、日本の中学校・高等学校における日本人英語教師と外国人英語指導助手との共同授業が盛んになり、英語教育界では「ティーム・ティーチング」がすっかりキャッチフレーズとなった。大学レベルでもここ数年いろんな所でティーム・ティーチングの実践が報告されている (Hanley, 1991; Ueno, 1993)。しかし、筆者の知る限りでは多くが会話のクラスでの共同授業であり、いわゆる一般教育の「英語」のクラスに T.A. を迎えて行ったティーム・ティーチングの報告は行われていない。

2. ティーム・ティーチングの意義

通常、教室において相手が外国人であるなしにかかわらず2人で教えることは、およそどんな科目でも、より適切で効率のよい指導ができると思ったことがあるに違いない。語学の授業において相手がネイティブ・スピーカー（以下 N.S. という）なら、導入や例示を対話形式で行ったり、発音練習などきめ細かい指導をする場合非常に助かる。読みの手本や、教室での機器の操作についても一人より二人の指導者がいれば便利である。また、何よりも学生一人一人と接する時間も増し、グループ活動などを通して、よりきめの細かい個人指導ができる。

また、最近の第2言語修得理論に沿ったコミュニカティブ・アプローチの指導理念は「目的言語を実際に使うことによって、その言語を習得させる」こと、つまり英語の授業の場合英語を使って何か作業を行う過程で言語を身につけさせるという考え方であるが、N.S. とのティーム・ティーチングを通して、このコミュニカティブ・アプローチが実現できる。特に、グループ活動を活用した教師と学習者との英語による対話を通して言語が習得されると考えられる。

しかし、ティーム・ティーチングにおいて、教師が教室に2人居るという事で問題がない訳ではない。いわゆる「船頭多くして舟、山に登る」がごとしである。同じ教室に自分とは別の教育観を持った指導者が入るとやりにくい面も多々あり、他の教師が教えたあとを受けて授業を行う際のやりにくさを考えるとよく理解できる。よってお互いの教育観が一致していなければならない。今回のティーム・ティーチングは片方が T.A. であるということもあり、こういった問題は起

こらなかつた。

3. 授業について

ティーム・ティーチングを行ったクラスは平成10年度の英語E102AとE22Aのクラスであるが、T.A.の募集があった時には、すでにシラバスも出来上がっており、特別にティーム・ティーチングのための授業計画を用意した訳ではなかつた。T.A.任用の希望は平成9年2月ごろ言語センターより順位をつけて大学院教務委員会に提出されて、大学院生で該当者を委員会より推薦され、任用が決定された。そして、3月頃に大学院研究会委員会で承認され、はじめて授業担当者はT.A.が任用されたことを知らされた。筆者も実際は4月に入ってからT.A.と初対面をし、ティーム・ティーチングの打ち合わせを行った。

英語E102Aのクラスは昼間主に開講された大学1年生向けの購読の授業であり、再履修者を含め60名の履修者があつた。教科書にはMacmillan Languagehouseの*Independent Reader: Improving Essential Reading Skills*を使用し、効率の良いリーディングの方法を修得することを目標にした。教科書にある練習問題を解いて行くことにより情報をすばやく的確にとらえる練習を第一に心がけて開発されたテキストで、Skimming(英文の大意をできるだけ速く正確に把握すること)、Scanning(自分に必要な情報をできるだけ速く見つけ出すこと)、英文文章構造の理解の方法、読んだ内容の整理方法、新出語への対処方法などが身につくように配慮されている。教科書にはこの他に大学1年生の共通テスト用に南雲堂の*English Proficiency Test (practice tests)*が指定されており、このクラスでは毎回、授業の最初にこのテキストを使って練習問題の解答、および質疑応答を行った。

授業の進め方は最初*English Proficiency Test*の問題に関する質疑応答と解答からはじめ、それが終わると*Independent Reader*の内容に入る。まず、その章で扱うリーディングの方法をクラス全員に説明し、例題を解いてみる。方法が理解されたところで、今度は5、6人の小グループに分かれ、教科書の練習問題を解いてみる。適当な時間を見計らって、リーディングの課題文をパラグラフごとにT.A.が読み、担当教官がそのパラグラフの要点を説明し、質疑応答を行いながら、内容理解において重要と思われる点に学習者の注意を促した。その後、T.A.と担当教官が各グループをまわり、内容の確認と練習問題のテーマに沿って質疑応答をおこなつた。これによって教師が学生一人一人と接し、彼らの疑問点などが明らかになったと考えられる。クラス全員にとって重要と思われる疑問点などが出された場合は、グループ活動を中断し、担当教官が説明した。そして、次の週には終了した章の単語の小テストを行った。なお、学習効果を高めるため教室内では基本的に英語を使用した。

英語E22Aのクラスは夜間主コースの大学2年生に開講された「英語」の授業で43名の履修者があつた。授業計画はライティングを中心に立て、教科書には英潮社の*Basic Writing Strategies*を使用し、最終的には英語でエッセイを書くことを目標にした。テキストは3つのセクションに分かれており、最初のセクションは「基礎編」で文単位の作文を扱い、文の中の意味や、文と文のつながりを明確にしてゆくための練習問題が主体である。第2番目のセクションは「パラグラフとエッセイの書き方」で、長い英語の文章を書くことによって、英文の文章構成を学ぶ。第3番目のセクションはより効果的な文章を書くために直喩や隠喩、控えめな表現と大げさな表現など様々な表現法を学び学習者は自己の考えをより明確で効果的に書くことを学べるようになっていく。このクラスではこの他に南雲堂の*A Shorter Course In Pops*(5分間ポップス)を教材に

使用し、毎回授業の最初に英語の歌でリスニング練習を行った。

授業の進め方は、最初の20分は「5分間ポップス」の歌を中心にリスニングの練習、練習問題の重要表現を利用してT.A.による発音および作文練習を行った。練習問題の中には歌に出てくる表現を応用した和文英訳もあり、日本語と英語の微妙な表現の違いなどもT.A.と担当教官の対話などによって例を挙げ説明していった。

次に、教科書 *Basic Writing Strategies* 中にある練習問題を中心に授業が進められた。この教科書の各章はその章のトピックの説明で始まり、理解の確認のため例が挙げられている。練習問題は主に2種類あり、最初のもは、内容をよく理解しているか否かを試すもので、その他の練習問題はアウトラインからパラグラフを作成したり、学習者自らが文章を作成するものである。まず、担当教官がその日の課題になっている章のトピックを説明し、例題をクラス全員で行った。つぎに5、6人の小グループに分かれ教科書の練習問題を解答し討論した。特に前期はCALLラボを使って教科書の練習問題を解答し、T.A.と担当教官がコンピューターの使用方法も含めて指導した。後期は主にグループ活動を中心にT.A.と担当教官がそれぞれ各グループをまわり練習問題の解答とそのテーマについて質疑応答した。学習効果を高めるため教室では基本的に英語を使用した。

4. 学生の反応について

ティーム・ティーチングに対する学生の反応を見るため、平成10年12月11日に授業内容全般についてのアンケート調査(補遺1, 2参照)が行われた。その結果を見るとT.A.を迎えてティーム・ティーチングを行った2つのクラスともN.S.との共同授業について好評であったことが伺える。平成10年度の授業は平成11年2月まで続けられるが、T.A.の任用は各クラス30時間の割り当てで、平成10年4月24日から始まり11月13日で終了した。

アンケートは無記名でマークカードを使って回答を求め、各質問項目について回答番号1を「その項目に書かれている内容に同意しない」場合、回答番号5を「同意する」場合として5段階評価するようにした。それに加えて、授業に対する感想を学生に記述させた。以下はティーム・ティーチングに関する質問項目に対する回答の結果と考察である。

表1を見ると、E102AおよびE22Aの両クラスともティーム・ティーチングの授業形式を好んでいることが分かる。約85%の学生が回答番号4あるいは5を選び、1人の先生で行う授業形式よりも2人で行う授業形式の方を好むと回答していることが分かる。これはこのような授業形態がまだ少なく学生が新鮮味を感じたことにもよると考えられる。

表1 質問項目1: 1人の先生の授業形式より2人の先生で行う授業形式の方が好きだ。

回答番号	1	2	3	4	5	Total
E102A	2	0	6	9	23	40
E22A	0	0	3	10	20	73
Total	2	0	9	19	43	73
%	2.7	0	12.3	26	58.9	100

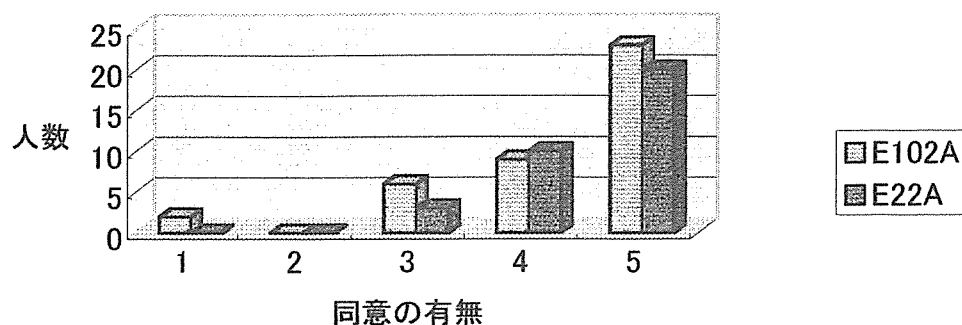


図1 質問項目1

次に質問項目2においてチーム・ティーチングの授業形式では1人の先生で行う授業に比べて活気があったかどうかを問うた。当然、1人よりも2人の先生がいればクラスの中は活気がみなぎると単純に考えられがちだが、共同で授業を行う場合、教室内でお互いの立場を認識し、協力し合う態度がない場合にはクラス活動における活気も薄れがちになる。しかし、表2を見ると全体の約85%の学生が、回答番号4あるいは5を選び、チーム・ティーチングのクラスに活気を感じていることがわかる。

表2 質問項目2: 2人の先生で教える授業形式は1人の先生で教える授業形式よりも活気があった。

回答番号	1	2	3	4	5	Total
E102A	2	0	3	15	20	40
E22A	0	1	5	14	13	33
Total	2	1	8	29	33	73
%	2.7	1.3	10.9	39.7	45.2	100

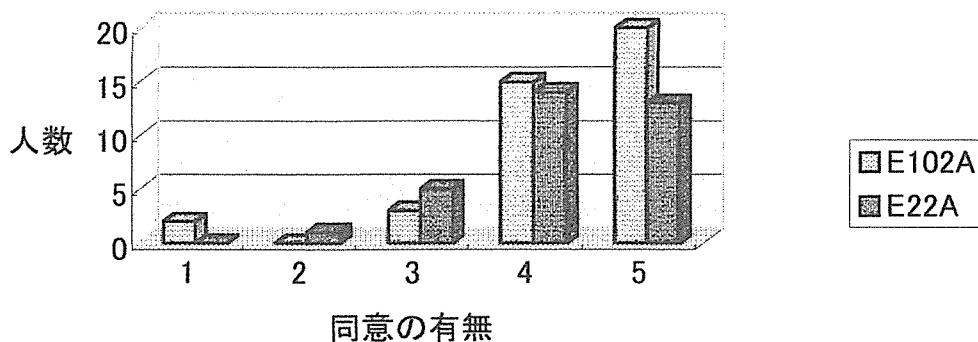


図2 質問項目2

質問項目3ではチーム・ティーチングの授業形式は普通の授業よりも分かりやすかったかどうかを問うた。2人の先生がいれば質問の機会も増えるし、T.A.と担当教官とで対話形式などを利用して、分かりにくい箇所や新出表現を例示できるのでより具体的に問題点を説明することができる。結果は表3にあるように約63%の学生が回答番号4または5を選び、過半数の学生が分かりやすかったと答えているのだが、少々気になるのは回答番号3（どちらとも言えない）を選

んだ人数が比較的多いことだ(図3参照)。これは、T.A.も担当教官も教室内ではできるだけ英語を使って教えたために、それに慣れていない学生にとっては授業内容を理解することが難しく受けとられた(表4および図4参照)と考えられる。

表3 質問項目3: 2人の先生で教える授業形式は1人の先生の授業形式よりも分かりやすい。

回答番号	1	2	3	4	5	Total
E102A	1	2	12	11	14	40
E22A	0	0	12	10	11	33
Total	1	2	24	21	25	73
%	1.3	2.7	32.8	28.7	34.2	100

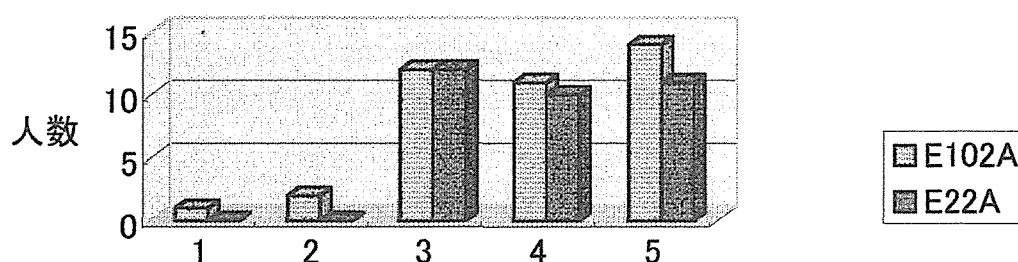


図3 質問項目3

教室内の使用言語が英語である授業がどれだけ学生に受け入れられたかを知るために質問項目9で授業の理解度を聞いた。大学入学以前に使用言語を英語とした授業を受けていないため拒絶反応を示したのではないかとと思われるが、別の調査(Hanley, 1991)によれば、大学に入るまでティーム・ティーチングでN.S.と話したことが全く無いと報告されているケースもある。この傾向はいわゆる受験校に多いと考えられるが、最近オーラル・コミュニケーションA, BあるいはCが導入されたにもかかわらず、その時間に受験対策の試験問題を行っている高校もあると言われている。今回のアンケート調査の結果を見ても慣れていないせいか日本語の説明がない場合、自信を持って理解できたとは言えないようである。回答番号3の「どちらとも言えない」および回答番号2の「あまり理解できなかった」が2クラスとも非常に増えているのが分かる(表4および図4、参照)。

表4 質問項目9: 日本語で説明されなくても授業は理解できる。

回答番号	1	2	3	4	5	Total
E102A	5	12	13	9	1	40
E22A	7	9	10	3	4	33
Total	12	21	23	12	5	73
%	16.4	28.7	31.5	16.4	6.8	100

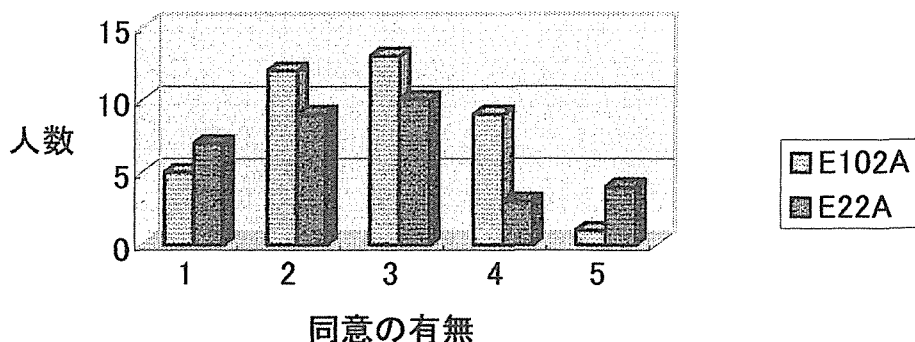


図4 質問項目4

質問項目4ではチーム・ティーチングの授業形式が自分にとって役に立ったかどうかを問うた。結果は2クラス全体で70%近い学生が回答番号4あるいは5を選択し、役に立ったと感じていることがわかる(表5, および図5参照)。これは英語力の伸びを自己診断させた結果にも反映されている。質問項目19ではそれぞれのクラスで目標としたスキル, すなわち, E102Aではリーディング・スキル, またE22Aではライティング・スキルが伸びたかどうか自己評価を問うた(表6および図6参照)。2クラス全体で約47%の学生が回答番号4および5を選択し, 約半数の学生がクラスで目標とした英語力の伸びを感じていることが分かる(図6参照)。

表5 質問項目4: 2人の先生で教える授業形式は役に立った。

回答番号	1	2	3	4	5	Total
E102A	2	2	10	8	18	40
E22A	0	4	4	12	13	33
Total	2	6	14	20	31	73
%	2.7	8.2	19.1	27.3	42.4	100

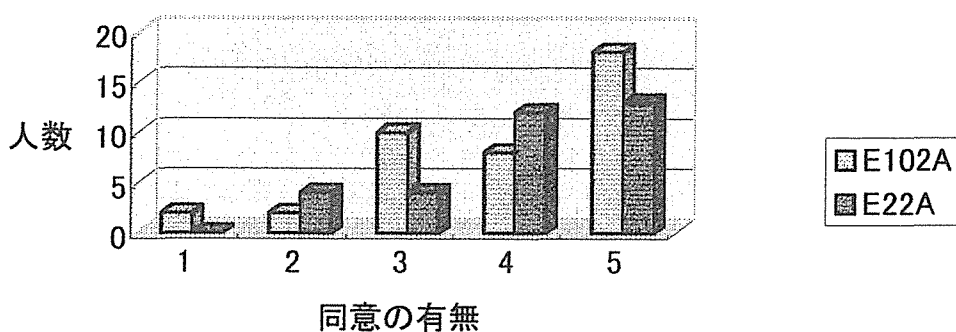


図5 質問項目4

表6 質問項目19: 読む力が伸びたと思う(E102A)。書く力が伸びたと思う(E22A)。

回答番号	1	2	3	4	5	Total
E102A	2	4	14	14	6	40
E22A	0	5	13	10	4	32
Total	2	9	27	24	10	72
%	2.7	12.5	37.5	33.3	13.8	100

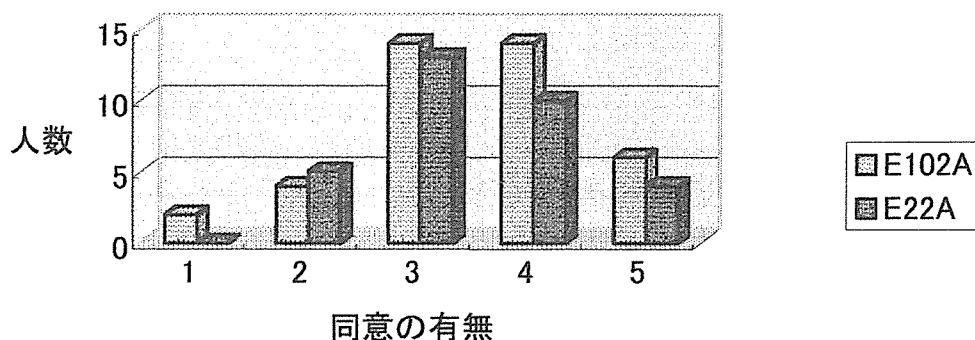


図6 質問項目 19

アンケート調査では5段階評価の他に、授業に対する感想を学生に記述させた。次にティーム・ティーチングに関する彼らの感想の一部を原文で紹介する。

英語 E102A

1. これまで外国の人と話したことがほとんどなかったので良い体験になった。
2. 今まで受けてきた英語の授業とは少し違って、興味深かった。また、読解力も多少はついたのでではないかと思う。
3. この講義は今まで受けてきた英語の講義とは違う形式で行われてきた。英語の会話を中心に英語を使う機会が多かったが、グループワークなど慣れない勉強にはいささかなじめない感じがある。また、英語を口に出す機会もなかったため、なかなか言いたいことが上手く表現できなかった。それでも、英語を身につける上で、このような講義は必要だと思う。
4. 先生が2人であること、特に外国人がいるということは、とても英語に興味をいただける点でもあった。単語の発音など生で聞けるので、すごく良かったと思います。けれど、宿題やレポートなどが多くて少し大変に感じました。
5. 外国人の先生に読んでもらうことはとても良いと思う。もっと外国人の先生と話を増やしてほしい。グループ学習は交流が深まり、1人で受ける授業より楽しく英語を学べた。
6. グループ形式の授業は普通の一斉授業よりおもしろかった。先生が2人いたのも気軽に質問できた良い点だったと思うし、外国人の先生は冗談を言ってくれたりしたので、楽しく授業を受けることができました。
7. 英語で質問されるとわからないことも多かったので大変でした。

英語 E22A

1. この授業で感じたことは、ただ単に先生が一方向的に授業を行うのではなく、グループになって話し合ったり、コンピュータを使ったりして、とても楽しかった。また、最初に音楽を聞くというのも、リラックスできて良かったと思う。外国人の先生の説明や話も楽しかった。
2. 文法英語とは違い、日本人と米国人の考え方の違いも言葉に反映されていて内容は難しかったと思う。でも少なくとも実際に役立つことばかり習ったので役に立った。
3. 授業内で先生とT.A.のタッドが2人だけで話している時、聞き取り理解が追いつかなくて、おいていかれる感じのときがあります。
4. ただ先生の説明を聞くだけの授業よりも役に立ちました。英語の細かいところも学べて良かったです。
5. 授業は楽しいです。Exerciseをやってみて解らなくても、グループで答え合わせなどをする

ので苦になりませんでした。むしろ、解らなくてもいいから取り組んでみて、その場合、どこが解らないのかという点だけは把握するように心がけた。学生生活 14 年目にして、はじめて「宿題」の意義が分かったようです。

6. 細かい説明や重要事柄に日本語が少ないことがあったので、内容を誤解したことがあった。英語で説明するのが最良の方針であれば、できれば文字にしてもらいたかった。
7. 私は英語をすべての教科の中で、最も苦手な教科とします。そのため授業について行くのに必死で、毎週毎週大変でした。また、日本人の典型なのか表現したり、前に出て話すことが嫌でした。一番、英語が不得意な人にあわせて、授業を行ってほしいです。無理でしょうが。
8. 普段の説明は英語でいいのですが、レポートの説明とか重要事項は日本語で説明して欲しい。

以上、学生の生の声であるが、言うまでもなく、この種のアンケート調査は担当する教師と T.A. の性格、熱意、力量、教育観などに依って大きく差が出てくるので、これをもって一般論は語れないが、この調査において、学生はティーム・ティーチングに興味を示し、役に立つと判断していることから英語学習の動機付けになっていることがわかる。上のアンケート結果を見るとこの E102A および E22A のクラスにおいて動機付けの点では成功したと思われる。しかし、クラス内で英語を使用することによって、学生が英語を習得できる最適な環境作りをしようとした教師側の意図はあまり伝わっていなかったと考えられる。これは、クラスが英語の習熟度別に編成されていないこと、および慣れという点で、中学高校時代に英語の音声教育をある程度受けた学生とまったく受けていない学生が混在していることに問題があると考えられる。しかし、このような習熟レベルが混在したクラスを教えるにはアンケート調査にもあるように、宿題の説明や重要事項は母語である日本語で確認すべきであろう。

5. T.A. の授業に対する感想について

次にこの 2 クラスの授業に対する T.A. の意見・感想を紹介する。

Comments on Team Teaching

By Todd Durrant

T.A. for Professor Takai

This year helping professor Takai as a teaching assistant has been a good experience for me. However, I believe this experience was not only good for myself, but also the classes in which I participated. I feel the students were benefited in many ways by having a native English speaker in class.

First, I think it was good for the students to have the chance to hear how English is used and pronounced by native speakers. This is an opportunity they do not receive when only studying from a textbook. I was able to contribute in this area by reading to the class and illustrating how certain vocabulary is used. Through this, I believe that students hearing ability improved along with their comprehension.

Second, professor Takai and I decided to break up the class into study groups while doing exercises from the textbook. I believe this was beneficial for the students to get them to be more active. In this, the professor and I were able to interact with students in a smaller setting. They were able to ask questions and communicate with us. Likewise, we

were able to discuss and explain with them English usage, meaning, and pronunciation. Students became involved in these active groups and became able to help each other. Therefore, I feel this group setting was beneficial to students.

Third, I feel it is a good idea to get students to interact with foreigners. While many or most of the students do not get a chance to communicate with foreigners, I think this is a good opportunity for them to do so. Students not only get a good understanding of the usage of English; they also get a chance to understand some of the cultural values that lie behind this usage. This is a very important part of learning another language. The only way students can gain this kind of knowledge is by interacting with a native.

In conclusion, I feel this has been a good experience for the students. It was also a very good experience for myself as I was able to communicate with students and make friends. It was fun for me to be able to explain and help students learn proper usage of English. Furthermore, the professor I worked with was very good and understanding of my schedule and responsibilities as a graduate student.

6. まとめ

最近のコミュニケーションを中心とした教授法であるコミュニカティブ・アプローチでは学習者に適した難易度レベルの目的言語 (Comprehensible Input) をできるだけ多く耳と目からインプットし、学習者がその言語を使用することにより習得されると考えられている。今回のアンケート調査の結果を見ると、N.S. とのティーム・ティーチングは学習者に十分な Comprehensible Input を与え、学習者が目的言語を使用する動機付けができた授業形式であると考えられる。2人の指導者がいることを利用した授業活動の工夫によって、授業を活性化できるが、アンケート調査の結果にも表われているように約85%の学生がクラスに活気があったと回答している。それだけ学生がグループ活動などを取り入れた授業内容に興味を示し、積極的に参加した結果であると考えられる。

また、コミュニケーション主体の授業を行うことによって学生もそれが「役に立った」と感じている。しかし、授業目標においた英語力に関しては約半数の学生しかその伸びが実感できなかったようである。これには様々な理由が考えられるが、その一つはクラスが習熟度別に編成されていないことである。記述式アンケートの中にも「母語である日本語で説明して欲しい」という意見が多く見られた。現在、小樽商大の言語センターでは英語のカリキュラム改革が行われているが、是非とも習熟度による段階別のクラス編成を実現してほしいものである。

語学の授業では会話だけでなく購読やいわゆる「一般の語学授業」においても N.S. の T.A. とティーム・ティーチングを行うことにより、クラスが活性化され、コミュニケーション能力の育成ができるものと考えられる。その意味からも語学の授業には N.S. の T.A. が必要である。しかし、こうした共同授業は2人の指導者がお互いの立場を理解し、協力して初めて成り立つものと確信する。

参考文献

伊藤克敏 1987. 「最近の言語修得論からみた Team Teaching」『英語展望』88: 2-23.

- 小笠原八重 1987. 「Team Teaching と教授法」『英語展望』88 : 8-13.
- 萬戸克憲 1993. 『外国人講師との授業—国際化時代の教育への布石—』東京 : 大修館書店
- Cominos, Antony. 1992. Managing Change in Foreign Language Education:
Interview with Minoru Wada, *The Language Teacher*, 16(11): 3-13.
- Hanley, Matthew M. 1991. Team Teaching Spoken English in the ILCS,
The Northern Review, 19:57-78.
- Howard, Darryl. 1995. Team-Teaching in Japan: The Shumei Project,
The Language Teacher, 19(6):4-10.
- Leonard, Todd J. 1994. *Team-Teaching Together: A Bilingual Resource Handbook
for JTEs and AETs*. 東京 : 大修館書店
- Ministry of Education, Science and Culture. 1994. *Handbook for Team-Teaching*.
Tokyo: Gyousei Corporation.
- Ueno, Yukie. 1993. Team-Teaching Oral English at the University Level:
A preliminary Survey, 北海学園大学学園論集, 77 : 1-12.

補遺 1

アンケート 英語 102A 平成 10 年 12 月 11 日

今後の授業方法に参考とするため、ご協力下さい。回答はマークカードを使い 1～5 までの数字で最も適したものを、鉛筆（またはシャープペンシル）で塗りつぶして下さい。

なお、1. を同意しない場合。5. を同意する場合として 5 段階評価して下さい。

授業について（マークカード A 欄使用）

1. 1 人の先生の授業形式より 2 人の先生で行う授業形式の方が好きだ。
2. 2 人の先生で教える授業形式は 1 人の先生の授業形式よりも活気があった。
3. 2 人の先生で教える授業形式は 1 人の先生の授業形式よりもわかりやすい。
4. 2 人の先生で教える授業形式は役に立った。
5. グループ活動は一斉授業よりも好きだ。
6. グループ活動で内容確認するとわかりやすい。
7. グループ活動は役に立った。
8. グループ活動には積極的に参加しようとした。
9. 日本語で説明されなくても授業は理解できる。
10. 外国人の先生の英語はわかりやすかった。
11. 日本人の先生の英語はわかりやすかった。
12. グループ活動において外国人の先生の説明は良くわかった。
13. グループ活動において日本人の先生の説明はよくわかった。

教科書について

14. 教科書は使いやすい。
15. 教科書の説明は良くわかった。
16. リーディング・スキルが良くわかった。
17. リーディング・スキルをこれからも使ってみようを思う。

自己診断して下さい

18. 出席は必ずした。
19. 読む力が伸びたと思う。
20. 日本語に訳さなくても内容がつかめるようになった。
21. 新出単語を英和辞書で調べなくともあまり気にならなくなった。
22. 読むのが早くなった。
23. 先生と英語ではなすことは抵抗ない、または抵抗なくなった。
24. 総合的に言って、英語力が伸びたと思う。

その他この授業で感じたことを裏も使って書いてください。（協力ありがとう）

補遺 2

アンケート 英語 22A 平成 10 年 12 月 11 日

今後の授業方法に参考とするため、ご協力下さい。回答はマークカードを使い 1～5 までの数字で最も適したものを、鉛筆（またはシャープペンシル）で塗りつぶして下さい。
なお、1. を同意しない場合。5. を同意する場合として 5 段階評価して下さい。

授業について（マークカード A 欄使用）

1. 1 人の先生の授業形式より 2 人の先生で行う授業形式の方が好きだ。
2. 2 人の先生で教える授業形式は 1 人の先生の授業形式よりも活気があった。
3. 2 人の先生で教える授業形式は 1 人の先生の授業形式よりもわかりやすい。
4. 2 人の先生で教える授業形式は役に立った。
5. グループ活動は一斉授業よりも好きだ。
6. グループ活動で内容確認するとわかりやすい。
7. グループ活動は役に立った。
8. グループ活動には積極的に参加しようとした。
9. 日本語で説明されなくても授業は理解できる。
10. 外国人の先生の英語はわかりやすかった。
11. 日本人の先生の英語はわかりやすかった。
12. グループ活動において外国人の先生の説明は良くわかった。
13. グループ活動において日本人の先生の説明はよくわかった。

教科書について

14. 教科書は使いやすい。
15. 教科書の説明は良くわかった。
16. ライティング・スキルが良くわかった。
17. ライティング・スキルをこれからも使ってみようを思う。

自己診断して下さい

18. 出席は必ずした。
19. 書く力が伸びたと思う。
20. 日本語を基に訳さなくても英語で書けるようになった。
21. 和英辞書で調べなくともあまり気にならなくなった。
22. 書くのが早くなった。
23. 先生と英語ではなすことは抵抗ない、または抵抗なくなった。
24. 総合的に言って、英語力が伸びたと思う。

その他この授業で感じたことを裏も使って書いてください。（協力ありがとう）